巻頭言

委員会活動の状況とオンライン・リアル

中尾　智博　Tomohiro Nakao

6月の日本精神神経学会（以後，学会）代議員総会で理事に再任され，三村將理事長による新執行部体制で副理事長を務めさせていただくこととなった．前期の理事活動をふり返ると，多くの委員会に入れていただき，学びの多い2年間であったと感じている．役割としては精神保健・医療・福祉部門の部門長を拝命し，精神保健・医療・福祉全般，自殺やスティグマ，性別不合，心理職やECT/rTMSといった幅広いテーマについて，委員の皆さんと議論を進めることができた．個別の委員会では，精神神経学雑誌編集委員会，精神療法委員会，専門医試験委員会，精神科専門医テキスト作成委員会などでの活動を行った．精神神経学雑誌編集委員会は，2023年1月に前任の大森哲郎先生から編集委員長を引き継いだ．学会の機関誌であり，本邦を代表する精神医学専門誌として高いクオリティを保ちつつ現在はDOIの獲得やDeepLによる掲載論文の機械翻訳の実施を試みている．精神療法委員会の活動については124巻6号の巻頭言に記したが，委員・主担当理事として精神療法教育のための活動を継続している．専門医試験委員会では試験の企画，作成，実施に携わっている．試験は症例報告（レポート），筆記，面接によって構成され，面接試験についてはコロナ禍以降webシステムでの実施となっている．レジュメを用いた共通症例についての諮問とロールプレイがメインだが，緊張して本来の力を発揮できていない受験者を目にする．緊張をカバーするのは普段から身につけておいた知識と見立ての力，そして精神療法的態度だと思う．受験前に指導医や同僚とロールプレイの練習をすることも有効であろう．『精神科専門医テキスト』は，久住一郎前理事長のご企画により池田学委員長のもと作成が進められ，各領域のエキスパートの執筆によりまもなく完成の予定である．後期研修医，指導医の先生方にぜひ手に取っていただきたい．

さて，3年にわたった新型コロナウイルスによるパンデミックがようやく終息を迎えつつある．実際には9波が押し寄せているという話も耳にするが，社会施策上は5類への移行によって他の感染症と同様の扱いとなり，日常生活への影響は格段に少なくなり，街の活気も戻っている．この3年で精神科医療にも大きな変化がみられた．もっとも大きなものの1つはリモート診療の導入であろう．ウイルスの特性上，物理的接触を減らすことが目的だったが，外来診療や入院患者の面会などにおいて電話，Zoomなどが導入され，大きな助けとなった．また会議や研修会などの実施でもリモートは大きな力を発揮した．現在参加している各種会議や研修会がもしすべて現地開催だったら移動だけでかなりヘトヘトになるだろうなと，想像するだけでぞっとする．

一方リアルの世界に目を向けると，社会生活の通常化とともに現地開催の学会が賑わいをみせるようになった．6月に横浜で開催された学術総会にも9,000名を超える参加者があり，コロナ禍前に比べ会場で熱心に聴講する参加者が多いように感じた（もっとも以前の自分があまり会場にいなかった可能性もあるが）．会場から駅までは少し距離があり，強い日差しのなかの往来で汗だくになったが，それすらも懐かしく思えた．旧知の精神科医と言葉を交わし，シンポジウムやワークショップでは演者や聴講者が生き生きと意見をぶつけ合う…，まさにリアルが戻ってきたんだな，と感慨深かった．リモートの恩恵を受ける日常ではあるが，リアルの世界での人と人の情緒的交流はまだまだオンラインでは味わえないものだと思いつつ会場を後にしたことを記憶している．

今後の学会の活動も，オンラインとリアル，両者の長所を取り入れながら進められていくことと思う．よりよい精神科医療の実現に向けて，会員の皆さまとともに取り組んでいければと考えている．

著者所属：日本精神神経学会副理事長/九州大学大学院医学研究院